

卒業制作 創作(陶淵明詩三首)・臨書(高野切第三種)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹中, 舞香 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4688

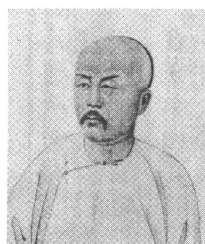
卒業制作

創作（陶淵明詩三首）・臨書（高野切第三種）

竹 中 舞 香

はじめに

本稿は、国文学科書道コースで制作した卒業制作の紹介・解説である。まず、作品の内容だが、従来の型式（二尺×八尺の画仙紙四幅と論文）とは異なり、一尺×六尺を六幅（主論）と、仮名臨書（副論）、そして作品解説を含めた小論文の構成となった。新しい形式に戸惑いはあったが、今となっては苦労はあったものの、やりがいと達成感を味わうことができ、充実した日々を過ごしてきたと思う。それでは、卒業制作の紹介と解説に移りたい。



趙之謙像

一、陶淵明詩三首（主論）

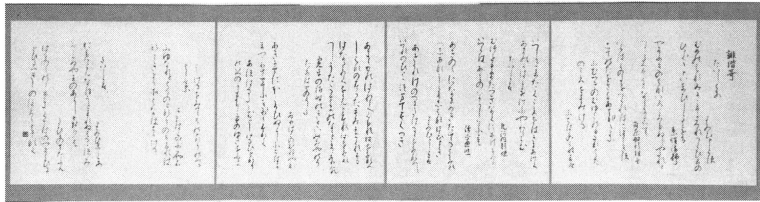
私の主論は趙之謙（一八二九—一八八四）の書風を「基盤とし、陶淵明の詩を書いたものである。趙之謙

は浙江省紹興の出身で、幼い頃は家産も豊かで勉学をする環境において困ることはなかったと言う。金石学を好み、齡二十にして秀才の頭角を現していた。この時、字は冷君としていた。そして、彼が三十一歳の時、この頃は郷試に励んでいた時期であったが、洪秀全による太平天国の乱に見舞われたために家が焼失し、やむなく避難生活をするようになる。妻とともに避難した趙之謙であったが、不幸にも妻は病没してしまい、彼は天涯孤独の身となる。避難生活を強いられ、立て続けに起こる不幸の中、彼は字を悲盦と改め、一八六三年に心機一転して北京へと上京した。そこで彼の心に平穩が訪れる。それは、独り身であった彼に親友である胡澍との出会いを果たし、また、沈樹鏞、魏稼孫らと意気投合し、人との親交により傷心した心を克服することができたからである。悲しみに満ちた心に日が射したのである。彼は、一八六四年に悲盦から无悶と号した。この頃から書画篆刻に一層、彩りが映え、大官である祁寯藻や潘祖蔭らに知遇されるようになった。のち八年間、北京での生活で趙之謙

今日天氣佳清吹典鳴彈感
 彼柏下人安得不為歡清歌
 散新殷綠酒開芳顏未知明
 日事余襟良以彈世短意常
 多斯人樂久生日月依辰至
 舉俗愛其名露淒暄風息氣
 澈天象明往燕無遠影來雁
 有餘殷酒能祛百意菊解制
 類齡如何蓬廬士空視時運
 傾塵爵恥虛罍寒華徒自榮
 斂襟獨聞謠緬焉起深情棲
 遲固多娛淹留豈無成人生
 無根蒂飄如陌上塵分教隨
 風轉此已非常身落地成兄
 弟何必骨肉親得歡當作樂
 斗酒聚比鄰盛年不重来一
 日難再晨及時當勉勵歲月
 不待人

陶淵明詩三首 舞春堂

漢字作品（創作・陶淵明詩三首）



仮名作品（臨書・高野切第三種）

分天地氣和以此時
 耕田一而當五名曰
 膏澤皆得時功春地

図1 楷書汜勝之書八屏

は進士になることを断念したが、五十歳で江西省の鄱陽県の知事に任ぜられるほどの器となる。しかし歴任して六年後に趙之謙は病により没した。このことから、彼の人生が字に表れていることが解る。字を度々に変えることが彼の強さではなく、初期の冷君から悲倉、そして无悶に至る自分の心に打ち勝っている過程に、屈強でありながら自分を律し、不幸の中でも努力と精進しようとする前向きな姿勢が趙之謙の強さではないかと思う。

そこで、私が彼の書風に魅力を感じたのは、彼が四十一歳の時に書かれたと思われる『汜勝之書』である。彼の時期で言えば无悶にあたるわけだが、なるほどと考えさせられる作品である。なぜなら『汜勝之書』の書風は趙之謙なりに考えだした逆入平出の筆法が完成されたものだからだ。

〈図1〉逆入平出の理論を考えだしたのは包世臣だが、趙之謙はそれを自分なりに解釈し、『汜勝之書』を完成させる基盤としたのである。完成させる以前の書風〈図2〉は、技法を意識しているも

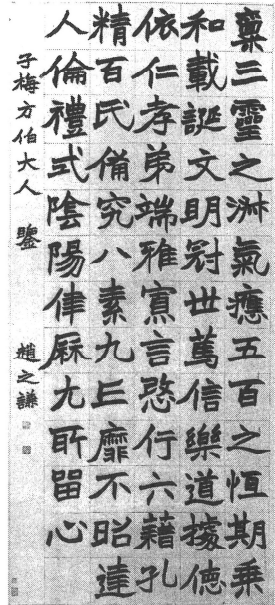


図2 趙之謙・楷書文語軸



趙之謙臨 鄭道昭『白駒谷題名』(五五歲)

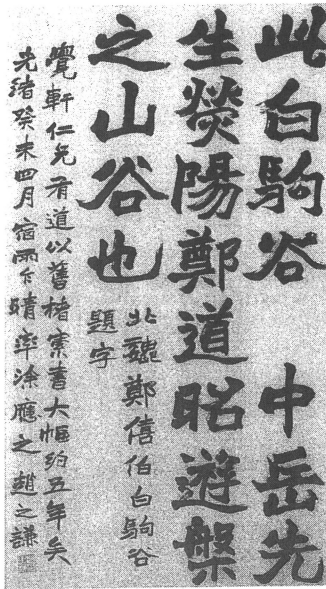
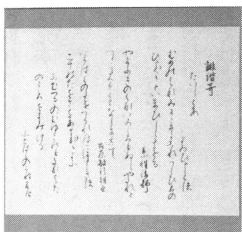


図3



臨書・高野切第三種 (部分)

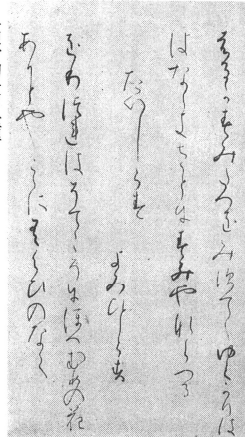
の、熱っぽさと勢いのある(図1)と比較すると少し軽さが目立つと思われる。特に左払いに関しては一目瞭然である。さらに、起筆と終筆にも趙之謙の個性(力強さ・剛毅)が表れている。

(図3)これは北魏の書風を取り入れた彼の獨創性によるもので、そこへ逆人平出を組み合わせ、独自の世界を確立しているのが解る。これら二つの書風を一つの形にしてしまう彼の芸術的センスには、驚くばかりである。そして、これは私の見解だが、その芸術的センスの根源は、趙之謙の心の支えとなった友人の存在が大きかったのではないかと思う。書には心情が表れるというが、彼の場合はどうだったのだろうか。「事実の小説よりも奇なり」というが、未熟な私には皆目見当もつかないことだろう。しかし、未熟なりに、この卒業制作において趙之謙の心を少しは感じたつもりである。特に注意したのは、迫力のある雰囲気を出しすぎず、尚且つ、緻密な分間の処理を同時に考えながら書くことであった。この趙之謙の獨創世界は面白かったが、それよりも集中力を持続させる難しさの方が強く印象に残っている。

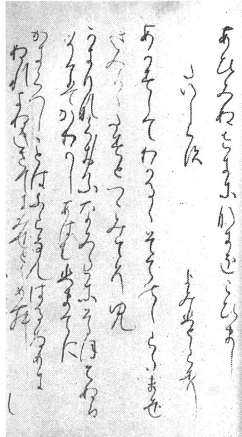
二、高野切第三種 (副論)

次に、副論の高野切についてだが、正式には『高野切古今集』(一〇四九年頃)と言う。内容は古今集を写本したものが、その一部が高野山

高野切第一種



高野切第二種



高野切第三種

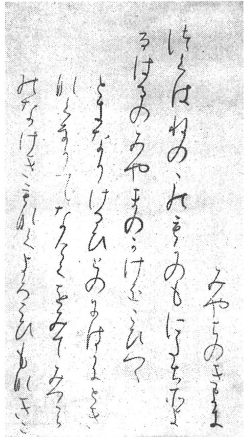


図 4

に保存されていたことから高野切という名がつけられた。『切』とは完本の一部を指す。また、一〜三種構成になっているのは、〔図4〕で分かるように、三人の筆者によって書かれたからである。

各々の筆者は確証がなく明らかになってはいないが、古筆研究家の飯島春敬先生によると、第一種―藤原行成の子の行経、第二種―源兼行、第三種―藤原公経の三者ではないかと推定されている。それではここで、各々の書風の特徴を簡潔に述べておきたい。

・第一種―気品が際立ち、包容力のある雰囲気はどこか温雅な趣を感じさせる書風。

・第二種―一字一字から強い意志を感じさせる書で、最も男性的な印象を与える書風。

・第三種―新しい時代の息吹を書に表した雰囲気、のびやかに書かれた清新さのある書風。

以上が各々の特徴である。私はこの三種のうち、特に第三種に魅力を感じ副論に選んだ。自由な筆使いと、軽快で流れるような筆運び、全体的に明るく澄んだ印象を与えている様に私は魅かれた。この古筆を臨書するにあたって気を付けたのは、運筆の速さによる流麗さを出すことだった。そして澄んだ線質をも損なわないように心がけた。

おわりに

ここまでが主論と副論についての紹介・解説である。拙い知識で

の記述となってしまうが、双方ともに力を入れた作品のスパイスとして読んで頂ければ幸いである。主論の豪快さと副論の明るさが私の卒論としての最も魅力的な部分だということをここで主張したい。また、私は卒業制作を通じて、自分自身が精進できたこと、そして先生のご指導の賜が、こうして作品という形にすることができたことを嬉しく思う。

付記

本稿をまとめるにあたって、宮崎彰夫先生にご指導して頂きました。

